

文学部生の

リアルな！学生生活

vol.133

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。



興味本位で始めた映像製作

私は2017年の春に中央大学に入学しました。高校までは野球部に所属し球児として練習に明け暮れる日々でしたが、大学生になって野球を離れたとき、自分のやりたいことは何なのだろうと考えました。そこで入ったのが放送研究会です。放送研究会とは映像製作を行ったり、ラジオを収録したりするサークルです。子どもの頃からテレビや映画を見ることは好きでした。また絵を描いたりなどクリエイティブなことも好きだったので、放送研究会で自分のアイデアを形にできたらと思い入りました。

映像製作自体はそれまでまったく未経験でしたが、新たなチャレンジとしてやってみることにしました。初め



「映文連アワード2020」で優秀作品賞（準グランプリ）を受賞した『レイデオロ』

て自分の作品を作るときにはわからないことばかりでした。そもそもカット割りや演出など気にして映像を見たことがなかったのを見様見真似で映像を作っていました。完成した作品を見たとき、達成感が込み上げてきました。自分のアイデアが映像として流れることの喜びは忘れられません。そこから映像にのめり込んでいきましました。映像にしたい脚本、演出がどんどん浮かんできて、それを実現できる



映像製作に打ち込んだ筆者

放送研究会での活動が楽しくてたまりませんでした。

仲間の手助け

映像製作というものには多くの段階があります。まず出てきたアイデアを脚本にしてその後コンテと呼ばれる映像の骨組みを作ります。現場では役者が役を演じ監督は演出をします。そしてカメラで映像を撮ってマイクを使い役者の声や環境音を録音します。カメラの画角の外では撮った画が綺麗に見えるように照明を焚きます。そのほかにもスケジュールを管理したり、撮影が円滑に進むようにすることはたくさんあります。そして撮った映像は最後に編集されます。これだけ多くのことを経て映像というものはでき上がりません。私は自分のアイデアと行動力には

自分の可能性を試す場

塩野峻平

文学部人文社会科学科社会学専攻4年
東京都立南多摩中等教育学校出身

自信がありました。しかしそれまでカメラや編集ソフトにも触れたことがなかったため、技術に関しては知識がまったくありませんでした。

そこで私は自分の映像を作るためにサークル内で多くの人間に助けを求めました。自分のやりたいことをプレゼンし、映像化できたらどんなに魅力的か訴えました。その結果、演技が上手い人、カメラが上手い人、スケジュール管理が上手い人などたくさんの人々に助けられました。この過程は私のなかで、大学生活で一番と言ってもいいほどの経験でした。自分から何かを発信して人に手伝ってもらうことは、大きなものを実現させるためには必要なことです。人に助けを求められるようになることは逆に自分の成長にもつながるのだと実感しました。

映画『レイデオ』

私はサークル引退の集大成として『レイデオ』という短編映画を製作しました。先述したようにこの作品にも多くの人々が関わってくれて完成させることができました。私はこの作品をもっと多くの人に知ってもらいたいと思いい映画祭に出すことにしました。その結果いくつかの映画祭で良い評価をいただきました。

それまで自分たちの映像も含めどこか映像を見るときに、カットのつなぎやカメラワークなど技術の面ばかりに注目して見てしまっていたところがありました。もちろん映像を完成させるためには技術も大切です。しかし『レイデオ』を自分たちのことを知らない人に見てもらったとき、多くの人に私たちが表現したかったことを伝えることができました。この伝えたい思い、メッセージというものが映像、特



© 映像文化製作者連盟
「映文連アワード2020」
表彰式にて

From the Faculty of Letters



文学部だより



研究室を のぞいてみよう

文学部
日本史学研究室

文学部にある「共同研究室」のなかから、今回は「日本史学研究室」を紹介いたします。日本史学研究室は3号館の7階にあり、30席ほどの閲覧室、ゼミに使用する演習室、約2万冊を収蔵する書庫で構成され、専攻の学生だけでなく中大生なら誰でも利用することができる場所です。通常であれば、調べ物や自習、グループ学習をする1年生から4年生までの学生たちが常に賑わっています。しかし2020年度は、開室時間の短縮や閲覧利用の縮小を行うなど、学生の皆さんにご不便をおかけしながらの開室を余儀なくされております。

閲覧室の書架には、辞書類や

通史の概説書、『国史大系』などの基礎資料をすぐに手に取れるように置いてあります。また、「古文書学演習」やゼミにおいて古文書を解読するための手助けとなる「くずし字」に関する辞典類、日本各地の遺跡について学ぶシリーズなどの、「文献だけでなく考古学的視点からも各時代の歴史を学ぶ」という専攻の特長を活かした考古学に関する文献を集めたコーナーもあります。書庫内の約2万冊の史料や文献もあわせて、実際に凶書を手に取り、歴史への興味をさらに深めてもらいたいと思っております。

近年では、ジャパン・ナレッジなどの便利な辞書・事典サイトや、国立国会図書館や各地の資料館・博物館のデジタルコレクションなど、インターネット上で閲覧できる資料も増えており、コロナ禍における自宅学習の一助となっています。しかし、歴史を研究するうえでは、いまだデジタル化されない資料がたくさん存在します。新年度には、学生の皆さんが資料を片手にクラスやゼミのメンバーと議論を交わし、学修を深めていく光景が研究室に戻ってくるようにと祈念しています。

自分の可能性

に映画にはもつとも大事な要素なのではないかと映画祭を回っていく中で感じました。そういう意味でもこの『レイデオ』という作品は自分の中の価値観を大きく変えることになった作品です。『レイデオ』を製作し、多くの人に見てもらうことができたのが学生生活のなかで最も嬉しい瞬間でした。

私は大学生という期間は自分の可能性を試す期間だと思えます。大学という場所には自分の興味にに応じていろいろな体験ができる場所があります。それは授業でもありませんし、部活動、サークル、また自主的に何かを得ようとするだけでも、大学の名前を借りて動くことができます。こんなに自分のために時間を使える期間は人生でもそんなに多くはないのではないのでしょうか。私は大学に入って映像製作を始めま

したが、自分がここまで映像にのめり込むとは思っていませんでした。これも映像製作に触れてみたらこそ生まれた「可能性」だと思えます。ここで見つけた可能性は必ずその先の人生に影響を与えます。私は大学生活で見つけたこの可能性を信じてクリエイティブな世界に進みたいと思えました。これからも多くの人に何かを届けられるものを作っていきたいです。